

# ボストン美術館蔵住吉具慶筆「徒然草図」について

下原美保\*

人蔵、「(同)」(江戸千家蔵)、「(同)」(東京国立博物館蔵)の三本も、具慶の「徒然草図下絵」を底本とした作品として位置づけ、住吉派で編纂された『倭錦』具慶の条の「徒然草大色昏数有」とは、これら一連の作品を指すものと推測した。

(二〇一一年十月二十五日 受理)

キーワード…住吉具慶、徒然草図、ボストン美術館、ウィリアム・

スタージス・ビゲロー

A Study of Scenes from Tsurezuregusa by Sunniyoshi Gukei in The  
Museum of Fine Arts, Boston

SHIMOHARA Miho

## 要約

本論では、かつてウィリアム・スタージス・ビゲロー(一八五〇〜一九二六)が所蔵し、現在、ボストン美術館で保管されている「物語図断簡」(Section from an unidentified illustrated narrative) (mfA No. 11.7156) が、徒然草一八三段を絵画化したもので、手がけたのは住吉具慶(二六三〜一七〇五)であることを明らかにした。ボストン美術館本が、具慶筆「徒然草図下絵」(斎宮歴史博物館蔵)と、寸法や同段の図様、絵画的特徴(表情豊かで癖のある顔貌描写、状況にあわせて様々なポーズをとる登場人物、逐語的で劇的な演出方法等)が近似していたためである。また、同じ理由で、「徒然草図」(個

\* 鹿児島大学教育学部 教授

## はじめに

ボストン美術館に「物語図断簡」(Section from an unidentified illustrated narrative) (mfiaNo.11.7156) と題された作品(図1)が所蔵されている。この作品はかつてウィリアム・スタージス・ビゲロー(一八五〇〜一九二六)のコレクションであったことが当館の記録によりわかっている。ボストンの名家に生まれたビゲローは、ハーバード大学卒業後、細菌学研究のために、パリのパスツール研究所に留学した。そこで動物学者であり日本陶磁器のコレクターでもあったエドワード・シルヴェスター・モース(一八三八〜一九二五)の講演に深く感銘を受け、七年間(一八三八〜一八八八)の日本滞在中に絵画、彫刻、染織、刀剣類など数万点にわたる品々を収集している。また、岡倉天心(一八六三〜一九一三)の日本美術院創設に際しては、自ら二万円を寄付するなど、日本の美術界にも大きく貢献している。帰国後は、ボストン美術館における日本部創設のために尽力し、彼が日本で収集したコレクションは、一九一一年に当館へ寄贈されることとなった。本作品(以後、ボストン美術館本と称する)も、その中の一点である。

ボストン美術館本については、すでに『ボストン美術館 日本美術調査図録 第2次調査 江戸時代 狩野派/土佐・住吉・復古大和絵派/肉筆浮世絵/曾我蕭白/伊藤若冲/近代』(アン・ニシムラ・モース 辻 惟夫ほか編著 講談社 一九九七年)で、基本的なデータと「住吉具慶様式の物語絵の断簡が1枚のみ残ったもの」との所見が紹介されている。

筆者も科学研究費基盤研究(B)「YAMATO-Eからみる日・英・

米の日本美術史観に関する比較研究」の助成を受け、二〇一〇年八月に本作品を調査させていただく機会を得た。

その後、住吉具慶筆徒然草図諸本との比較により、作者、題材名ともに不確定であった本作品が、徒然草一八三段を絵画化したもので、手がけたのは住吉具慶(一六三一〜一七〇五)であることが判明した。以下は、その検証である。

## 1 ボストン美術館本の現状

本作品は、縦二九・三糎、横一九・六糎の紙本に、鮮麗な彩色で物語の一場面が絵画化されており、落款、印章は無い。現状はマクリであり、表装の痕跡が見出せないため、制作当初のまま保存されたと推測される。

本作品の画面中央には、荷降ろしを手伝う男に突然馬が噛みつく場面が、下方には黒い牛が暴れる場面が配されている。往来では、頭に籠をのせた女性、数珠を手にした尼僧、荷物を背負った男、赤い太鼓を天秤棒で担いだ芸人、童子を連れた公卿などが行き交い、突然のハプニングに驚き、逃げ惑っている。また、邸の門前では、騒動を聞き付けた老人が暴れた馬を指差し、その傍らでは米俵を担ぐ男が迷惑そうに睨む。画面右下には簡易な店舗が配され、童子を連れた尼僧が買い物をし、竹垣の裏には鎖に繋がれた犬が伏している。

結論から先に述べると、本作品は徒然草一八三段が絵画化されたものである。この段に対応するテキスト(注1)は下記の通りである。

人舐く牛をば角を截り、人喰ふ馬をば耳を截りて、その標とす。

標を附けずして人を傷らせぬるは、主の咎なり。人喰う犬を養ひ飼ふべからず。これ皆、咎あり。律の戒めなり。

すなわち、「人につつかかる牛は角を切りとり、人にかみつく馬は、耳を切り取って、その目じるしとする。この目じるしをつけないで人に危害を与えさせてしまうのは、その飼い主の罪である。また、人にかみつく犬をば、育て飼ってはならない。これらは、すべて、罪がある。これは、昔からの律にある禁制なのである」(注2)という内容である。本作品では、暴走する牛(角が切られている)や、人を噛む馬、あるべき犬の飼い方として、鎖に繋がれた犬が描かれている。

## 2 筆者についての検討

ボストン美術館本の特徴は、表情豊かで癖のある顔貌描写、特に、引目鉤鼻から脱し、小鼻や鼻の穴まで描いた実人物的表現(注3)、下膨れで団子鼻の女性の顔貌、登場人物の状況にあわせて様々なポーズをとる体軀、瓢箪のように盛り上がった手足の筋肉表現等である。このような特徴は、住吉具慶(一六三一―一七〇五)の人物描写の特徴に重なる。住吉派は土佐派から分派し、寛文二年(二六六二)に設立された流派であり、具慶はわずか二代目にして幕府の御用絵師に就任した絵師である。先述したボストン美術館調査図録での所見「住吉具慶様式の物語絵」も、具慶作品のこのような特徴によるものであろう。

このことの証左となるのが、斎宮歴史博物館蔵「徒然草図下絵」(以下、具慶A本とする)(注4)の存在である。

具慶A本は、各葉の縦が二八糎、横が一八糎前後の紙本に、徒然草の各場面を墨画で描いたものである。現在、マクリの状態で九六葉揃っており、徒然草二三四段中八二段が確認される。具慶A本は、濃墨線だけで描かれているが、描き直しの跡はほとんどなく、細部まで丁寧に描き込まれている。白描画における本画のような完成度であるが、画面枠外に段落数や覚書が見られ、登場人物の顔の向きを訂正した紙片(六〇段)が添付されているため、具慶A本が下絵であることは間違いないと思われる。

具慶A本も、落款、印章がなく、添付資料も残されていない。しかしながら、具慶作品に特徴的な人物表現が具慶A本にも見出され、また、反転した図様が、具慶法橋時代の基準作である「徒然草図画帖」(東京国立博物館蔵 以下、具慶B本とする)に見出せる(注5)ことより、具慶の真筆としてよいであろう。

図2は具慶A本中の一葉である。両本とも縦長の画面で、寸法もほぼ同じ大きさである。

画面の構図に注目すると、ボストン美術館本の上部には、先端が丸く並行にたなびく金雲が配されており、具慶A本にも同様の雲形が描かれている。

両本ともに、画面右上から左下にかけて斜めに往来が描かれ、左方に邸が(建物の構造は両者で異なる)、右方に店舗が配さるという構図である。また、画面中央には、人を噛む馬と暴れ出す黒牛が描かれ、往来の人物(頭に籠を載せた女、後ろ髪を一つにまとめ両手を広げた童子、被(かつぎ)を被って振り返る女性、太鼓を担いだ芸人、童子を連れた公卿)や、さらには画面右下の鎖で繋がれた

犬の描写まで一致している。

ポストン美術館本と具慶A本では、全体の構図や往来の人物、動物の表現等が近似するため、両者は制作過程において近い関係にあるといつてよいだろう。

この点をさらに検討するため、具慶が手掛けた徒然草図諸本とポストン美術館本とを照合してみたい。

### 3 具慶筆徒然草図諸本の中でのポストン美術館本の位置づけ

徒然草図は、住吉具慶のみならず、父如慶も数多く手掛けた画題である。同派で編纂された『倭錦』の具慶の条には「徒然草大色帯数有」と、父如慶の条にも「徒然草数々」とあり、徒然草図制作は同派における制作活動の中でも重要な位置を占めていたと推測される。

以前、筆者は拙稿(注6)の中で、住吉如慶・具慶筆徒然草図諸本における具慶A本の位置づけを試みた。本論でも、これに基づきながらポストン美術館本の検討を行いたい。

以下がポストン美術館本以外の具慶が手掛けた徒然草図の概要である(注7)。

〔徒然草図下絵〕(斎宮歴史博物館)(具慶A本)

九六葉 紙本墨画 マクリ 縦約二八糎 横約一八糎

〔徒然草図画帖〕(東京国立博物館)(具慶B本)

一冊 絹本着色 画帖 縦一七・五糎 横二四・二糎

〔徒然草図〕(個人)(以下、具慶C本とする)

一幅 紙本着色 掛幅 (絵画) 縦三一・六糎 横一九・八糎

(詞書) 縦二四・二糎 横一九・八糎

〔徒然草図〕(江戸千家)(以下、具慶D本とする)

一幅 紙本着色 掛幅 (絵画) 縦二九・一糎 横一九・五糎

(詞書) 縦二九・二糎 横一九・九糎

〔徒然草図〕(東京国立博物館)(以下、具慶E本とする)

一葉 紙本着色 マクリ 縦二八・六糎 横一九・三糎

〔徒然草其他下絵〕(東京藝術大学)(以下、具慶F本とする)

二巻 紙本墨画 卷子

(上巻) 縦三二・二糎 (下巻) 縦三二・四糎

巻末に上記六件の詞書筆者、収録段落数を含めた表を提示した。ご参照いただきたい。

具慶A本については先述の通りであるが、同年代の徒然草図の中でも、海北友雪(一九五八〜一六七七)筆「徒然草絵巻」(個人蔵五七段を除き全て絵画化)に次ぐ段落数を有し、具慶の制作活動のみならず、近世初期の徒然草図制作を考察する上でも重要な下絵とみなすことができる。

具慶B本は、徒然草から五〇段を抜粋したもので、詞書と絵が見開きになるよう添付されている。絵画部分に落款(「法橋具慶筆」・印章(住吉畫所)朱文方印)を有し、松原茂氏によって、飛鳥井雅章(一六一一〜一七九)の孫娘清姫(？)一七一)が、延宝六年(一六七八)に福井藩主松平綱昌(一六六一〜九九)のもとへ嫁い

だ際、制作された輿入れ道具であることが指摘されている（注8）。具慶A本こそ具慶B本の底本と考えたいところだが、画面の縦横比が異なるため（具慶A本は縦長、具慶B本は横長）、全体の構図も異なる。縦長の具慶A本では、余白になりがちな画面上下を霞や遠景で処理しているが、具慶B本にこのような配慮は見られない。また、九段、二七段、六九段、一一〇段の図様については両者で全く異なっている。さらに、事物の描き込みの度合いも具慶A本の方が具慶B本よりはるかに豊かであり、具慶A本がB本の底本であるとは考えにくい。

具慶A本を直接的あるいは間接的な底本として制作されたと考えられるのが、具慶C本、D本、E本である。

具慶C本は掛幅装の作品で、徒然草の一〇五段に取材している。画面には高貴な男女が御堂の廊下で何事かを話し、三人の従者たちが興味深げに覗きこむ様子が描かれている。画面上部にはテキストの一部が記されており、添状より皇女宗栄女王（一六五八〜一七二一）が筆を染めたことがわかっている。

具慶D本も掛幅装の作品で、徒然草の六二段に取材している。画面には、父親に文を書く幼い皇女と、庭で蝶を追う皇女（同一人物）が描かれている。本図の画面右側には本段のテキストの一部と徒然草の注釈書である『なぐさみ草』（松永貞徳著 跋文・慶安五年（一六五二））の解説が付されている。

具慶E本は、マクリの状態で保存されている。徒然草の一二五段に取材しており、画面には、説法を終えたばかりの聖人のことを、「唐の狗に似候ひなん」と人々が笑いあう場面が描かれている。

三本とも、徒然草のある段落のみを取り上げて絵画化しており、画面の寸法も近く、鮮やかな顔料を用いながら、事物を細部まで描き込む点が共通している。また、それぞれ落款、印章を欠いているが、具慶A本と三本の同段とを比較すると、建物の構図から人物配置、登場人物の人数まで、その図様がほぼ一致し、具慶の人物表現に共通する上記のような特徴を見出すことができる。これらのことより、三本とも具慶が手掛けたことはほぼ間違いないと考えられる。具慶A本が下絵であることは先に確認した通りであるが、同本は具慶C・D・E本の直接的、あるいは間接的な底本であった可能性が高い。

これら三本と、寸法や絵画的特徴において近似するのが、ボストン美術館本である。上記した通り、ボストン美術館本の寸法は縦が二九・三糎、横が一九・六糎で、表情豊かな癖のある顔貌描写、様々なポーズをとる体躯の表現が、具慶C・D・E本の人物像に近い。よって、ボストン美術館本とこれら三本とは、具慶A本を底本としたシリーズの一部と推測することができる。しかしながら、これらが一組として存在していたのか、底本となる具慶A本から、求めに応じて個別に絵画化されたのかは、現在のところ不明である。いずれにしても、『倭錦』の「一 徒然草大色帯数数」とは、これら一連の作品を指すものと推測されよう。

ボストン美術館本や具慶C・D・E本のように、複数の段を収録した説話や、物語を数段抽出して、あるいは、ある段だけを取り上げて、独立した作品とするのは、具慶にとつて珍しいことではない。源氏物語を例に挙げると、MOA美術館や個人が所蔵する「源

氏物語四季賀絵巻」は、源氏五十四帖より「初音」、「常夏」、「野分」、「行幸」、「若菜上」を選び、四季の賀を盛り込んだ源氏絵であり、朧月夜の君だけを描いた源氏絵も存在している(注9)。その他、伊勢物語でも一場面だけを取り上げた「在原業平観梅図」(フリア美術館蔵)や「富士見業平図」(個人蔵)なども確認できる。これらは、新たな宮廷文化の享受者となった將軍家や大名家からの数多くの需要に応じ、古典物語絵が簡略化された結果とも推測される。近世における古典受容や編集の在り方を示す事例として、注目しておく必要があるだろう。

#### 4 ポストン美術館本におけるテキストの絵画化とその特徴

以前、拙稿(注10)でも触れたが、具慶が手掛けた徒然草図諸本の特徴は、テキストを逐語的に絵画化し、享受者を意識した劇的演出を盛り込む点にある。ポストン美術館本の場合も、「人舐く牛をば角を載り」に対して、角先を切られた黒牛が左右から二人の男に押さえられる様子が絵画化されている。また、「人喰ふ馬をば耳を載りて、その標とす。」に対しては、荷降ろし中の男性に、黒い馬が喰いつき、邸の玄関先にいた老人が米俵を担ぐ隣の男性に指さしながら何かを語っている様子が描かれている。詞書の続きにある「標を附けずして人を傷らせぬるは、主の咎なり。」とでも語っているのであるか。ここでも、その様子がいかに迷惑であるかを強調するかのよう、黒馬を押さえ込もうとする男や、この場から逃げ去らんと両手を上げて慌てふためく男、あきれ顔の女性等が描き込まれ、その場の雰囲気や劇的に盛り上げている。さらに、「人喰う犬

を養ひ飼ふべからず。」に対しては、鎖に繋がれた犬が画面右下に小さく描かれ、鑑賞者の視線をその場面に導くように、一人の童子が店先の窓からその様子を眺めている。

以上のように、ポストン美術館本でも、他の具慶作品同様、テキストを逐語的に、なおかつ劇的に演出する表現を見出すことができる。ポストン美術館本の底本であった具慶A本の図様は、当時、刊行された松永貞徳著『なぐさみ草』(跋文・慶安五年(一六二二)や『首書つれづれ草』(元禄三年(一六九〇))等といった徒然草の注釈書にある挿絵や注釈文、あるいは、当時の国文学者で具慶とも交友関係にあった北村季吟(一六二四〜一七〇五)等から得られた情報に裏打ちされたものと推測される。

往來の人物に注目すると、それぞれの身分や男女、年齢の差などによって、衣装や髪形などが細かに描き分けられ、この中には、赤い太鼓を担いだ芸人や、魚や海老の入った籠を頭にのせる女性など、先行作品の引用というより、実際の観察によって知り得たであろう風俗が活写されている。先学によって度々指摘されていることではあるが、当世の風俗描写は具慶が最も得意とした分野で、「都鄙図巻」諸本をはじめ、「箱崎八幡縁起絵」(宮崎宮)や「元三大師縁起絵巻」(寛永寺蔵)など、多くの作品に見出すことができる。

本作品は落款、印章がなく、表装される以前のマクワリ的小品であるものの、表情豊かな人物表現やテキストの逐語的絵画化、画面を盛り上げる劇的演出、当世風俗の活写など、具慶作品の特徴が凝縮された優品ということができよう。

## 小括

本論では、住吉具慶筆徒然草図諸本より、ボストン美術館本は住吉具慶が手掛けた徒然草図一八三段であることを解明した。また、その底本は斎宮歴史博物館蔵具慶筆「徒然草図下絵」であり、個人や江戸千家、東京国立博物館が所蔵する「徒然草図」と同じシリーズであることがわかった。ボストン美術館本はマクリの状態であり、落款・印章が無いことで作者や画題が特定されず、現在に至っていたが、これらがシリーズであったとするならば、他にも作者や画題不明の作品として保管されている可能性もある。今後、これらが発見され、具慶研究が進むことを期待し、小論はここでひとまず筆をおきたい。

## 〔附記〕

本論は、平成二〇年～二二年度科学研究費補助金基盤研究（B）「YAMATO-Eからみる日・英・米の日本美術史観に関する比較研究」による研究成果の一部である。

本論をまとめるにあたっては、ボストン美術館学芸員アン・ニシムラ・モース氏、当館学芸員補佐エレン・タカタ氏、斎宮歴史博物館学芸員榎村寛之氏に大変お世話になった。心より感謝の意を申し上げたい。

## 注

- 注1 『日本古典評釈・全注釈叢書 徒然草全注釈 下巻』（安良岡康作 角川書店 昭和五二年）
- 注2 注1より引用した
- 注3 榎原悟「住吉派解題『源氏絵』―附諸本詞書―」（『サントリー美術館論集』三号 サントリー美術館 平成元年十二月）
- 注4 概要については、榎村寛之「斎宮歴史博物館蔵（徒然草下絵（仮題）について）」（『斎宮歴史博物館研究紀要』一三 斎宮歴史博物館 平成一六年三月）で紹介されている。
- 注5 具慶A本の六八段（大根の顔をした武者が「なにがしの押領使」を助ける段）と具慶B本の同段の図様は、部分的には異なるものの、反転した図様とはほぼ一致する。
- 注6 拙稿「住吉具慶の徒然草図制作について―斎宮歴史博物館蔵（徒然草図下絵）を中心に―」（『デアルテ』二二号 九州藝術学会 二〇〇六年三月）
- 注7 注3を参考にした
- 注8 松原茂「住吉具慶筆（徒然草図面帖）―制作期とその背景―」（『MUSEUM』三八七号 昭和五八年六月）
- 注9 「源氏物語 朧月夜の君図」（個人蔵）
- 注10 注6



図2 徒然草図下絵(部分)  
(斎宮歴史博物館蔵)

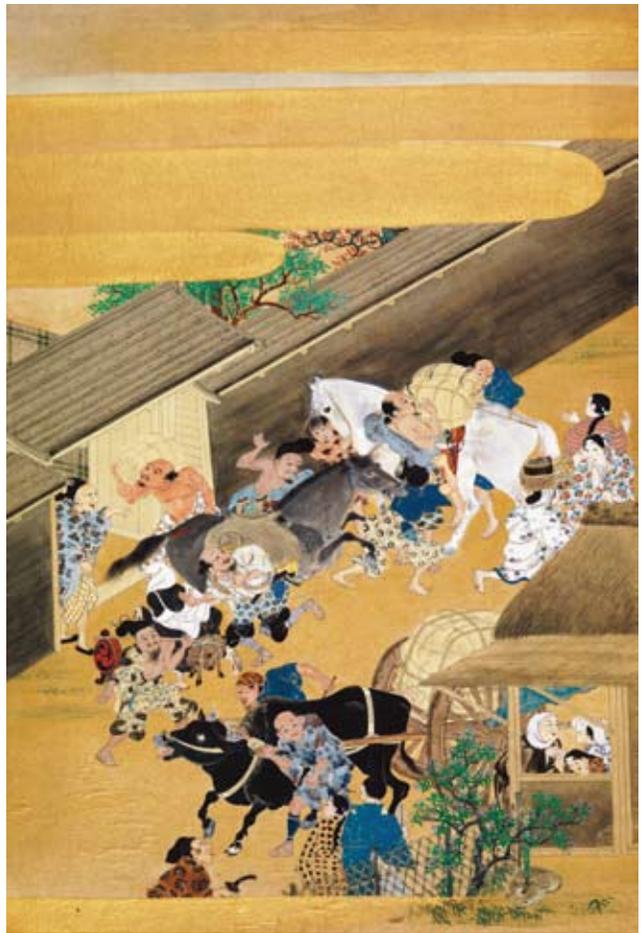


図1 住吉具慶筆「徒然草図」(ボストン美術館蔵)  
photograph © 2012 Museum of Fine Arts, Boston

表 住吉具慶筆徒然草図諸本

本論での呼称	作品名 員数 品質・形状	寸法 (cm)	作者 ( ) は推定	詞書筆者	収録段数	制作年代	所蔵者	挿図 No.
具慶A本	徒然草図下 絵 96葉 紙本墨画 マクリ	縦 約28 横 約18	(住吉具慶)	詞書無し	1・3・8・9・10・13・14・ 16・17・23・27・40・45・47・ 48・51・52・53・54・59・60・ 62・66・67・68・69・70・73・ 77・80・83・84・87・89・90・ 92・93・95・96・99・101・ 102・103・104・105・106・ 107・109・111・114・115・118・ 119・120・121・125・128・ 129・134・135・137・138・ 139・141・144・149・152・ 153・154・158・162・171・ 173・175・177・180・181・ 183・184・185・208・213 (下線 部は同段を二葉絵画化。この他 六葉については段落の確定出来 ず)	不詳	斎宮歴史 博物館	2
具慶B本	徒然草画帖 一冊 絹本着色 画帖	縦 17.5 横 24.2	住吉具慶	鷹司房輔・ 妙法院 堯 恕・大炊御 門経光・飛 鳥井雅章・ 千種有能 他45名	序・1・3・5・8・9・13・ 15・18・22・31・32・39・40・ 43・45・62・67・68・69・71・ 74・76・80・81・101・103・ 109・110・117・119・131・145・ 146・151・154・164・166・ 173・174・181・189・216・ 218・225・234・235・237・245	延宝6年 (1678)	東京国立 博物館	—
具慶C本	徒然草図 一幅 紙本着色 掛幅	(絵画) 縦 31.6 横 19.8 (詞書) 縦 24.2 横 19.8	(住吉具慶)	宗栄女王	105	不詳	個人	—
具慶D本	徒然草図 一幅 紙本着色 掛幅	(絵画) 縦 29.1 横 19.5 (詞書) 縦 29.1 横 19.9	(住吉具慶)	詞書有り (筆者不詳)	62	不詳	江戸千家	—
具慶E本	徒然草図 一葉 紙本着色 マクリ	縦 28.6 横 19.3	(住吉具慶)	詞書無し	125	不詳	東京国立 博物館	—
具慶F本	徒然草其他 下絵 二卷 紙本墨画 卷子	(上巻) 天地 31.2 (中巻) 天地 30.5 (下巻) 天地 30.5	(住吉具慶)	詞書無し		不詳	東京藝術 大学	—
ボストン 美術館本	徒然草図 一葉 紙本着色 マクリ	縦 29.3 横 19.6	(住吉具慶)	詞書無し	183	不詳	ボストン 美術館	1

(拙稿「住吉具慶の徒然草図制作について—斎宮歴史博物館蔵〔徒然草図下絵〕を中心に—」(『デ アルテ』22号 九州藝術学会 2006年3月)で作成した表を一部改訂して掲載した)